

希臘の興亡に就て : 論説

著者	堀, 貞
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 2
ページ	8 - 1 3
発行年	1892-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/3954

ざるに非らず只爲さるにあるのみ、舊態本藩の志士、松田範義の歌に曰く「ひとすじに思ひこめてし眞心は神もたのます人もたのます」と少しく絶望の意味を含むなきにあらずと雖、又以て其毅然たる獨立の大丈夫たるを想見すべし、又畏くも 孝明天皇御製の和歌を拜誦す、「皆人の心のかぎりつくしてし後にぞたのめ伊勢の神風」と吾人之を拜誦する毎に、大御心のある所を伺ひ見て、轉感佩の情に堪へざるなり、人此精神あり、千難排まべく、萬苦忍ぶべし、事に處して左右を顧みず、嚴然として居り、猛然として起ち、斷乎として進み、斷乎として退く、眞には大丈夫の本色にあらずや、此元氣若し満たば、一社會因て以て立ち、一國因て以て安きを得ん、我邦初め武を以て國を建つ、數十年來氣運劇變、文化日に進み、優柔從て來る、空談曉々或之論理の末に走するの輩、漫に自ら文明の風を得たるとなす、揮て是無爲坐食の徒のみ、元氣の消亡、生産力の薄弱、今日の如きもの永く之を改めずんば、災禍蓋し測るべからざるものあらんとす、是天下有爲の士が猛然自ら決すべきの時期にあらずや、

希臘の興亡に就て

堀

貞

生者必滅合者常離とは佛氏が事物自然の理を説きし語にあらずや然り之れを自然に歸せば天下何事か自然ならざらん凡る物必ず本あり源あり百花は爛熳たるは其根幹あればなり大河の浩浩たるは其の源泉あればなり故に之を自然と云は、乃ち自然なり然れども其自然たる所以は之を

して自然ならしむるもの存するに因るなり余輩史を讀み國家盛衰興亡の跡を見て之を事物自然の理なりと云はゞ復た何をか論せん然りと雖詳に其然る所以を考ふれば實に其然らざるを得ざるの理あるを見るべし

夫れ希臘は地中海最東の一小半嶋なり而して此小半嶋が夙に世界文明の先導者となす世界歴史の開卷第一に於て其活劇を演ぜしものなす請ふ少しく之に就て觀察せん

抑も希臘は北方溫帶の好位置を占め三面皆海にして無數の嶋嶼其近海に羅列す内地は山脈連亘幾多の小邦を成す土地豐饒風色明媚なり是を以て其近海の人民は自ら航海通商の業に習ひ山地の人民は自ら勇敢忍耐の風を養成し且つ其小邦皆山岳四圍の間に割據せるを以て大古未開人種が方に幼芽を萌しつゝある風俗習慣も他族の侵略の爲めに之を挫折せらるゝことなく能く其特性を發達せしめ以て其の進歩を保つことを得たり此の如く希臘の諸邦は分裂割據すると雖其人種の同一なると其言語の同一なると其風俗習慣の同一なるとは能く希臘諸邦をえて一家兄弟の想あらしめたる所以なり彼等謂らく希臘人はヘレンの子孫なりと加之に共同の祭儀ありて苟も「ヘラス」人種たるものは盡く來りて其の儀に與り同一の信仰を表せり是に由て之を觀れば希臘は社會進歩の要素と社會結合の要素とを集め盡く之を占有したりと云べし宜なる哉文學技術は夙に此邦に開け他穴居的人種が未だ蠢々たる動物の生活を營めるの際巍峨たる高樓大廈希臘の天に聳へ高而雄麗なる詩歌音樂は希臘人の唱ふる所となり偉人傑士彬彬乎として輩出し其創

設ける偉業を遂げ今日歐米文學技術の根底をなすに至れり

夫れ然り然と面して此の榮爛たる文明の邦國が端なくも生者必滅の理に支配せられたるは何故ぞ請ふ之を論せん

釋迦又曰く天上天下唯我獨尊と蓋此心之實に人間の通有性にして何人か敢て帝王たるを欲せざらん何人か敢て人の強を挫き已れの下に居らざるを欲せざらん見ずや樹秀於林風折之るにあらずや無心の風雨猶ほ然り況んや人に於てをや蓋此心は黨派心——嫉妬心の本源に在て吾人希臘の歴史に徴して明に之を觀るべし

抑スパルタ アセンは希臘史上に於て主要の活劇を演せしものにして其性質殆んど全く相反せりスパルタはドリアン人種の代表者にして豪強慍悍風俗質朴にして言論を賤み廉耻を尊び保守主義を以て唯一の方針とせし而るにアセンスはアイオニア人種にして快活辯論を嗜み自由を愛し大に進歩主義を取り此の如く相異りたる二雄族が希臘の小邦に割據するに至れり是れ時に當りペルシヤの大軍歐洲に侵入し希臘の存亡亦さ且夕に迫まれり是を以て希臘の諸邦は其互に割據せるにも係らずスパルタ アセンは希臘軍の率先者となり一たび之をマラソンに迎へ二たび之をサラミスに敗り三たび之をプラテティアに鏖し遂はペルシヤをして再び希臘を窺ふの念を絶たせむるに至れり是に於てかスパルタ アセンの勢力漸く盛にスパルタは兵を以て四隣を壓伏し威を南方希臘に振へり而してアセ人も亦大に海軍を擴張せエジアン海の主權を収めデ

ロス同盟の牛耳を執るに至れりされば早晚此両雄族の衝突を來すべきは自然の勢にして間もなくコルシラに於たる些末の一事は遂に兩國戰端の導火となり爾來三十餘年間妖雲慘憺希臘の海陸と一大修羅場となれり而えて財盡き力衰へ又た昔日の餘勇を留めざるに至れり是に於てマヘドン王フサリツプは北方勇敢の蠻族を帥る一擧して希臘の境入り山川草木盡く其蹂躪する所となりスパルタ アセンは僅に其名を貽すに至れり

嗚呼ヘレニック人種を以て言語を同ふし習慣を同ふし信仰を同ふし一家兄弟の如き想ありし希臘人民も黨派心——嫉妬心の爲め又は遂に其一致を爲すを得ず文化繁爛たる邦土を擧げて夷狄の馬蹄に汚され長く其の羈絆を被むるに至れり人生結合の恃むべからざる一に此に至れり歎すべき哉

余嘗て怪む希臘諸國がペルシヤ戰爭に一致してマセドニアの侵略を抗するを得ざるを何ぞ蓋し曩にスパルタ アセンは両々相對し隱然敵意を有すと雖未だ干戈に訴ふる程には至らざりやなと然るにペルシヤの外患は希臘全体の危急に關するのみならず亦た直は自國の存亡に關するものなれば從來れ嫉妬心敵愾心は之れが爲めに奪はれたりと謂ふべし然りと雖其後數多の英雄輩出し其の爲せるもの實に著しきものありと雖大概皆自己功名心の爲に使役せられたるものにして其の爲に國家を憂ふるの士は余チモレオンを除くの外希臘史上之を認むるを得ずシエミストクルス

トクルス

ペリサニアス

クレオン

ペリクルス

アルシビヤデス

ライサンダーの如き皆一

世の策士と謂ふべきも未だ以て憂國の士とはなすべからざるなり彼等が其始め民間に在るの間は其行爲は實に公明正大なり其言語と實に愛國の熱情より迸出せるものゝ如き然るも一朝高貴の位置を得政權漸く己れの手に移るや彼等は忽ち其假面を棄て眞相を見はし功名心の馳る所殆んど全く其の始めと表裏するもの比々皆是なり宜なる哉希臘英雄にして其末路を善くせしもの幾人かある余は常に英雄の末路此の如くなるやを疑へり而して國民は此等英雄の順便に使役せられ鬭争一日も止むなく兩國人民の憤怨は日々益々甚だしく彼等は已に希臘人なる名目の下に一致すること能はざるに至れり悲哉是れ北方の夷狄が一舉て之を覆せる所以にあらすや嗚呼何そ其容易かるや

顧みて我國を察するに太平洋の西岸に位する一帝國にして山川秀麗土地豐沃民皆勇敢に於て義を好み上に一天萬乗の天子を戴き二千五百有余年我祖宗の薰化を受け完全無缺の國体を奉持し未だ嘗て他國の侮りを受らず國威赫々以て今日に至れり盛なりと謂ふ可しとせば社會結合の要素は固より「ヘラス」人種と同日の論にあらずと雖豈に是を以つて得々として自安すべけんや見よ現今我國黨派の競争は如何其の政治家なるものは如何盡く眞に國家を憂ふるものなるか盡く眞に良心に従て行ふものなるか而して其公義心は果して黨派的の感情に支配せられざるか其の言行は果して功名心より左右せられざるか而して其の一黨派の主なる者に於て時に或は聞に堪へざる醜聞を流さる者なきか余乳臭兒安んぞ敢て之を知るに與からん然りと雖禍を未萌に防くは

智者の取る所之余輩と當にベルシヤ、マセトンの侵入に應ずるの覺悟なかるべからず又た其勢力は更に之より大なることを覺悟せざるべからず若し其れ國家興亡を以て事物自然の理にして人力の得て如何ともすべからざるものと云はれ余輩又た何をか言とん

時

勢

無

一

生

風靜かに氣沈み、万籟寂たるの頃、寒燈をかゝけて、古來幾多の歴史を繙き去り、徐ろに、社會の活舞臺に於て、或は善、或は惡、正邪相戦ひ、曲直相爭ひ、英雄偉人起り、奸者小人顯はれ、社會をして一進一退せしむる所以を察すれば、蓋し豁然として悟る所あかる可らず。其間一大勢力の、社會を左右するあり、時に潺々たる溪流の如く、時又滔々たる洪水の如く、或は花の如き文明界を現じ、或は血を見るの革命時代を出え、社會をして、一步は一步の變遷を來さしむるもの、夫を如何なる勢力ぞや、

彼の一大勢力や、跡を潜め世を晦ますが如しと雖、其勢の猖獗なるは、王公も其實を失ひ、虎豹も其暴を譲り、去り來るの間に於て、よく英雄を生じ、またよく偉人を殺す、避けんとして避くべからず、遁れんとして遁る可らず、社會をして、忽ち混亂拯ふ可らざるの戰國たらしめ、忽ち光彩陸離たるの平和たらしむ、小にしては一時人心の嗜好より、大にしては、一國々民の進化する、常にこの一大勢力に、これを依らずんばあらざるなり而して實に此の勢力は物質界の所謂權力に外な